生きるこころにも心せよ

小説・太宰治

野原一夫

新潮社

生きることにも心せき

小説・太宰治

野原一夫

新潮社

生くることにも心せき
——小説・太宰治

一九九四年一〇月二五日　発行

著者　野原一夫
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社　新潮社
東京都新宿区矢来町七一　郵便番号一六二
電話　営業部　東京03三二六六一五一一一
編集部　東京03三二六六一五四一一
振替　東京四—八〇八番

印刷所　株式会社精興社
製本所　加藤製本株式会社

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります。

© Kazuo Nohara 1994, Printed in Japan

ISBN4-10-335306-6 C0093

生くることにも心せき——小説・太宰治＊目次

田辺あつみとの出逢い 7
小山初代の出奔 25
戸塚会談 42
腰越心中 65
非合法運動と自首 77
作家太宰治の誕生 94
鎌倉での縊死未遂 116
パビナール中毒 128
水上心中 161
下宿屋鎌滝 174
再婚 186

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

辻音楽師の王国 210
帰郷 222
弟子たち 228
苛烈な戦時下で 238
無頼派宣言 246
流行作家 254
聖母子誕生 264
ひとすじの恋情 287
死への傾斜 305
あとがき 324

装画　中西　和
装幀　新潮社装幀室

生くることにも心せき——小説・太宰治

田辺あつみとの出逢い

昭和五年十一月二十五日の夜の九時ごろ、銀座のバー「ホリウッド」の女給田辺あつみは、カウンターの隅に坐り、トランプの一人占いをしていた。退屈さをまぎらわすためである。

二十人も客が入れば満席になるこぢんまりとしたバーだが、その夜の客は、奥のボックスでなにやら株相場を話題にしているらしいふたりの中年の男だけである。女給がふたり、手持無沙汰そうにそばに付いている。

昼すぎから降りだした雨が夜に入るとはげしさを増し、風も出てきた。

「お客さん、もうないかもしれないねえ」

そばに寄ってきた朋輩の鈴村よし子が、声をかけてきた。よし子が借りている家の二階にあつみは間借りしており、店にくるのも帰るのも一緒である。

着ている紺に縞柄のお召は、最近に無理して月賦で買ったのだが、帯にまでは手がまわらず、よし子のを借りていた。

「こう暇だと、あつみちゃん、早く帰りたいでしょうね。なにしろ、まだ新婚ほやほやだもの

ね」

微笑を返しながら、順三はいまごろなにをしているのだろうと、ふと思う。家財道具とてろくにないさむざむとした間借りの六畳で、つくねんと本でも読んでいるのだろうか。

早く帰りたいと思う、その一方で、だが、その思いをうち消すような、はげしい波立ちが、胸の奥にあるのをあつみは覚える。もう一度、あの、チシマという名の青年に、逢いたい。

その青年がはじめて店にきたのは、十日ほど前だった。

十時をまわる頃、ふと気がついたらそこにいたというほどにひっそりと、その青年は店に入ってきた。鼠色の袷(あわせ)に黒っぽいセルの羽織を着ていた。痩せた長身の、いくらか猫背ぎみで、蒼白い細おもての顔には、知的な気品ともいえるものがあった。

静かな足どりでカウンターに行き、隅に腰をおろした。手のあいていたあつみはその隣りに坐った。

どこかで呑んできたらしく、かすかに酒の匂いはあったが、酔っているらしい気配はなかった。

「ウイスキーを。そう、ストレートで」

低い声で言い、あとは黙りこんだ。

のどの奥にぶつけるような呷(あお)りかたで、二口か三口でウイスキーグラスをからにし、すぐにあとを注文した。目のふちがいくらか赤らんできたが、どこか疲れたようなその表情にはすこしの変化も見られなかった。

バー勤めをはじめてから三カ月近くになるが、ひとりできて、黙りこくって呑んでいる客になど、あつみはそれまで接したことがなかった。

しかしあつみは、なぜか、すこしの気づまりも感じなかった。いやむしろ、からだがほどけて

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

いくような、なにかにやわらかく包みこまれてゆくような、ふしぎな安らぎを、覚えていた。
二度めにその青年が店にきたのは、五日ほど前の、八時すこしすぎだった。
ふたりの朋輩と四、五人連れの客に付いていたのだが、青年の長身をドアのところに認めると、我ながら驚くほどの素早さであつみは立ちあがっていた。
前と同じように、カウンターの隅に並んで腰をおろした。
「きょうは、お酒をもらう。実をいうと、ウイスキーよりもお酒のほうが好きなんだ。この前は、ちょっと気取ってみただけ。銀座のバーなんて、はじめてだったんでね」
口もとをまげ、いたずらっぽそうな笑いをうかべた。はじめて見せる笑顔だが、それだけ自分にうちとけてくれたのかと、あつみは嬉しかった。
「持ち合わせがあまりないんだ。五円くらいしかない。だから、お酒をゆっくりもってきてください」
そうは言いながらも、またたくまに一本あけ、次を注文した。すすめられるままに、あつみも杯をあけた。まだ酒の類を呑みなれていなかったが、気持がはずんでいるせいか、いくらでも呑めるような気がした。
青年はやはり、口数がすくなかった。生れはどこかとか、勤めはじめてどのくらいになるのかとか、ききたがる客が多いのだが、青年は名前すらもきこうとしなかった。
年の頃からすれば学生かと思えたが、着ているものは学生の身分からすればずいぶん上等そうだし、それに、生きていることにくたびれたような、へんに老けた感じもあった。
名前だけは知りたいと思いあつみがたずねると、青年は口のなかでつぶやくように、「チシマ」と言った。はっきりはききとれなかったが、あつみにはそうきこえた。

なにか適当な話題をさがし、客の口を軽くするようにと、かねがねマダムから言われていた。しかしあつみは、そんな気になれなかった。

明るい性格とあつみは自分でも思っていたし、ひとからもそう言われていた。人付合いもよく、おしゃべりも好きなほうだった。

しかしいま、ほとんど言葉もかわさず、ただすすめられるままに杯を口にはこんでいるのが、とても自然のことと思えた。

それまで気付かなかった別の自分を見出したような、ふしぎな気分だった。

まるでなにかにせかされているように、チシマの酒を呑むピッチは早かった。

もうとうに五円では勘定が足りなくなっているのを、気付いていたが、あつみにはかえってほほえましかった。足りない分は、自分がしょいこめばよい。

勘定の金高は、バーテンが小さな紙片に書いて女給から客に手渡す。十三円なにがしと書かれてあるその紙片を、あつみが手のなかで握りつぶそうとするその一瞬、チシマは素早く見てとった。

軽い狼狽をチシマは見せた。

「いいのよ、頂けるだけで。あとはまた、この次ということに」

とまどいを見せるチシマに、あつみは笑いかけた。

その夜からあと、日に何度となく、チシマの顔が目の前にちらつくようになった。そのたび、からだが固くなり胸がしめつけられるような、かとおもうと、ふわふわと空中にさまよいあがっていくような、奇妙な感覚におそわれた。

恋、というものなのだろうか。

順三と親しくなったときにも、こんな奇妙な感覚を味わったことはなかった。もしこれが恋というものならば、生れてはじめての、恋。

不貞、という言葉が頭をよぎる。

小さな悪魔が一匹、自分のなかにひそんでいるのかと、不安と怖れをあつみは感じる。

もう逢わないほうがいいのかもしれない。逢うと、なんだか、ただではすまないような気がする。

強い雨は降りつづき、風も勢いを増してきたようだった。

なんどめかのトランプ占いに物憂く手を動かしながら、だが、もう一度、逢いたい、胸を噛む痛切な思いがこみあげてくる。

はげしい音を立ててドアがあき、四人の若者が、なだれこむように店に入ってきた。

「ひでえ降りだ。ズボンがびしょ濡れだ」「銀座の美女とやらを見たい一心で」「ほっと一息。さあ呑み直そうぜ」口々に騒々しくしゃべりたてる若者たちのなかに、ひときわ長身の、学生服にマントを羽織ったチシマの姿を認めると、反射的にあつみは立ちあがり、駈け寄っていた。

入ってすぐのボックスを若者たちは占領し、あつみとよし子がそばに付いた。

かなり呑んできたらしく、沸き立つような賑やかさだが、そのなかで、チシマのはしゃぎようがひときわ目立っていた。

「いや、さっきの話の続きだけどね。その少年が蔵のなかで仙術の本を見つけだした。仙人の術。熱心に読みふけり、一年ほども修業して、鼠と鷲と蛇に変身できる術を会得した。鼠になって蔵のなかをかけめぐり、鷲になって大空を飛びまわり、蛇になって蔵の床下にしのびいり。

そのうち少年は隣りの油屋の娘に恋をした。あの娘に惚れられたいものじゃ。目のさめるよう

ないい男になりたい。十日ほど修業し、念願かなって、いまや近在一のいい男。
鏡のなかを覗いて、少年はおどろいた。色が抜けるように白く、頬はしもぶくれ、眼はあくまでも細く、口髭がたらりと生えている。天平時代の仏像の顔。しかも股間の逸物まで古風にだらりとふやけていた。
仙術の本が古すぎたのさ。天平のころの本だったんだ。ハッハッハッハ」
愉快そうに高笑いし、
「おもいっきり滑稽な小説を書いてみたいと思ってね」
かとおもうと、眼をむいて大げさに見得を切り、歌舞伎の「切られ与三（よさ）」の声色を、おかしな節回しをつけながら唸ってみせたりした。
よくしゃべり、よく笑い、おどけた顔で仲間をからかい、まるで別人のようなチシマのはしゃぎように、あつみは目を見はった。
どちらが、この人の本体なのだろう。
いや、もしかすると、この人は、無理をして、けんめいに仲間たちにサービスしているのかもしれない。自分のなかにある暗さや侘びしさをひたかくしにして。
学生であることはわかったが、小説を書いているらしい。作家志望なのだろうか。
とすると、順三と似通っていることになる。自分の帰りを待っている順三の顔が、目の前をかすめた。
田辺あつみが高面（こうめん）順三と知り合ったのは、八カ月ほど前の三月はじめ、広島市の繁華街にある喫茶店「平和ホーム」でウエイトレスをしていたときである。

少女のころから、周囲の思惑を気にせず、やりたいことを積極的にやりとげようとする奔放な一面があつみにはあった。

広島市立第一高等女学校の三年のとき、十六歳のあつみは、髪を切って断髪にした。そのほうが自分に似合うと思ったからだが、昭和初頭の女学生としては驚くほど大胆なことだった。さらにまた、親の反対を押し切って真紅の洋服を新調し、洋装で街なかを闊歩した。当時の流行語でいえば、モガ、モダンガールの姿である。

東京や大阪ならいざしらず、広島のような地方都市ではその姿はたちまち人目をひき、派手な顔立ちのためもあって、写真館からモデルになってくれるよう頼まれた。

翌年の春、人気絶頂だった奇術師の松旭斎天勝が一座をひきいて広島にきて、華々しく公演した。舞台を観たあつみはたちまち魅了され、毎日のように楽屋を訪ねて内弟子にしてほしいと頼みこんだ。

その熱心さに根負けした天勝は、みずから足をはこんで父の島吉に了解を求めたが、娘が芸人ふぜいになることなど、昔かたぎの島吉が承知するはずはなかった。

その後まもなく、あつみは親に無断で退学届を学校に提出した。まじめに通学し、面白くもない授業を受けることに、嫌気がさしていたのである。

家事を手伝いながら、好きな文学書に読みふける日が二年近くつづいた。

近いうちに開店する喫茶店「平和ホーム」に勤めないかと、店をまかされている知り合いの女性からすすめられたとき、あつみはよろこんで承知した。はじめての客商売だが、なんのためらいもなかった。

開店早々から客の入りはよかった。その初々しさと美貌のせいで人気が出て、あつみを目当て

に通う客が多かったからである。
おなじ繁華街の喫茶店「チロル」の経営者高面順三もそのひとりだった。順三は毎日のように「平和ホーム」に通いつめた。
あつみよりも五つ年上の順三は、文芸同人誌を主宰していたほどの文学青年で、「チロル」の客には作家志望の青年や画家の卵が多く、芸術的な雰囲気が漂っていた。
ひと月ほど勤めたのち、あつみは突然、「平和ホーム」をやめ、「チロル」に移った。店の雰囲気に惹かれたためもあったが、順三のひたむきな恋情にほだされたからである。
そして、ふたりは、同棲した。順三、二十四歳、あつみ、十九歳である。
文芸同人誌を主宰する文学青年だったが、順三のもともとの志望は、新劇の俳優になることだった。
上京して新劇俳優への道に進みたいと順三が切り出したのは、同棲してから四カ月ほどたった頃だった。あつみはあまり気乗りしなかったが、順三の強い希望を容れた。
八月中旬、上京したふたりを、旧知の鈴村夫妻が東京駅に出迎えてくれた。順三の先輩格になる鈴村も俳優志望で、左翼系のある劇団で働いていた。収入はほとんどなく、妻のよし子が銀座のバー「ホリウッド」で働いて家計を支えていた。
鈴村夫妻は銀座に近い内幸町の借家に住んでいて、順三とあつみは、とりあえずその二階の六畳に間借りさせてもらった。
すぐに劇団関係の仕事に就くことはむずかしく、順三は就職口を探さねばならなかった。職業紹介所をあちこちまわったが、昭和初頭以来の不況が深刻化するなか、失業者は巷にあふれ、特別の技能を持たない順三のような者の就職は、ほとんど絶望的だった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com